
派遣のヒーロー募集中時給5800円

麻技淮

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

派遣のヒーロー募集中時給5800円

【Nコード】

N9635I

【作者名】

麻技准

【あらすじ】

ヒーローといっても、色々あるのだ。

ウルトラマンや仮面ライダーみたいな、みんなの憧れるヒーローもあれば彼のように超現実の中で生きるヒーローもいる。

彼はヴァイラス星人。

ヴァイラス遊星からやってきた、宇宙人だ。

派遣のヒーローで、時給5800円。

(前書き)

この物語はフィクションであってほしい。

俺はヴァイラス遊星から地球に飛来し、ヒーロー派遣会社『テラエクス』に勤めている派遣ヒーローである。

ヴァイラス遊星はだいたい、ウルトラの星と地球の間にある星で、宇宙のド田舎である。

俺達ヴァイラス星人は地球人に似ていたが、ヴァイラス遊星では数万年前から内乱があり、細菌兵器ばかり使っていたために突然変異が起こり、全身が緑色になり、毛が抜けてしまった。

その姿は、緑色のブルーマンにしか見えない。

地球では、スーツを着ている、三十代中盤の男性に変装しているが。「しっかし……子供店長はいいよなあ、稼ぎいいんだろうなあ」

P M 9・54。

五畳風呂なし、共同トイレ付きのアパートの二階で、コタツにあたりながら、ジャージ姿の俺はテレビを見ていた。

アナログと出ている、もうすぐ見れなくなる（2009年12月現在）古いテレビだ。

暗いニュース番組が、日本の不況を延々と解説していた。

その合間にはコマースヤルが、延々と流れている。

俺には買えない車。

俺には買えない液晶テレビ

エトセトラ、エトエトラ。

「今日も平和だったな」

世界の車窓からを見て、俺の一日は終わる。

日中はヒーローの仕事がなかったため、他の勤め先である。

ラブホテルの、バイトであった。

時給がけっこういいため、頑張って仕事した後はこうしてくつろいでいる。

派遣ヒーローは時間給であるが、一日にそう何度も事件が無く、発

生しても都内には既に数百の派遣ヒーローがいるために、出番が無いのである。

因みに、時給5800円。

恐るべきことに、危険手当では常に出ず、怪我をした際に医療費が二割負担となる。

常に危険と隣り合わせの実情の割には、あんまりな給与である。

殆どの事件が一時間で終わるため（というか、それくらいで終わらない危険な事件は派遣に割り当てられない）、月の稼ぎがピンからキリまでであり、生活が不安定だ。

何より、母星に帰るための資金も貯蓄しなければならなかったため、金の工面には本当に苦労させられる。

中には、一生、この辺境の星で暮らす羽目になる宇宙人も少なくない。

九鳥山政権になってからは、マニフェストである『派遣ヒーロー宇宙人の母星帰還資金の助成制度』により、少しは資金難は緩和される、と思われていたが、まったくそんなことはなかったぜ。

故に、俺のように複数の仕事をかけもつヒーローも少なくない。

「おー！！こいつジューラスじゃないか！！」

お笑い芸人の学校のドキュメンタリーで、同期の派遣ヒーローをやっていたジューラスが映っていた。

ああ、派遣やりながら、こういうのめざしているのか。
がんばれ、道は険しいかもしれないが。

「あ！今度はアレファングルも！！」

俺の同期が何人もテレビに映り、やるせない気持ちになっていた。
派遣ヒーローは、一般人の通報が警察にあった時、犯罪を犯している存在が戦闘員や怪人であった場合、警察の要請で危険を排除する。それが主な仕事だ。

『緊急出動、緊急出動、BN145は現場に出動せよ』

BN145とは、俺の識別番号である。

派遣のヒーローはかなりの数がいるため、識別番号でしか呼ばれない。

い。

まあ、名乗ろうとしても、バン●イの商標登録に引っかかってしまうのだが…

腕のアラームがけたたましく鳴り、俺は一瞬にして戦闘形態へと変身する。

というか、星人の姿へ戻っただけであるが…

目に当たる部分の無い三角形の形をした頭部、あとは緑色の全身。とても簡単なデザインであった。

さあ、仕事の時間だ。

俺は繁華街の裏路地で、黒い全身タイツの戦闘員を追いかけていた。どうやらATMを破壊し、資金を持って逃走しているらしい。その両手には、アタッシューケースが握られていた。

「キキッ！！」

戦闘員がアタッシューケースを放って振り返り、ナイフで俺を突き刺す。

突き刺すが、俺には効果が無い。

ヴァイラス星人には物理的ダメージは殆ど効かない、殆ど、だ。

「ヴァイラスパンチ！！」

俺の鉄拳が炸裂、せず戦闘員に受け止められる。

そう、俺には決定打が足りないのだ。

殴り合わないと、戦闘員を倒せない。だから、いくら体をゲル化出来ても、ダメージが蓄積する。

「キッ！！」

「へへっ…はは！！結局最後は正義が勝つんじゃ馬鹿野郎めこの野郎め！」

ストレスを、意識の飛んだした戦闘員にぶつける。

思い切り後頭部を蹴り飛ばす。

この瞬間だけは、誰にも見られたくないものである。

結局戦闘員一人倒すのに、結局5分かかってしまった。

「ガバガバガバア!!」

そして、背後から怪人に襲われる。

思い切り吹っ飛び、路地裏のバケツに頭から突っ込む。

デザインから判断するに、チェーンソーヤマアラシ怪人である。

右腕にけたたましい音を鳴らすチェーンソーを装備しており、かなりバイオレンスな匂いをする怪人だ。

「うわっ、やべえ!! 倒せないし!!」

ヒーローが助けを求める構図は、あまり地球人に見られたくはないが、そんな事は言ってもらえない。

危険だ、死んでしまう。

遊戯王的にいったら、俺は攻撃力1200守備力500。

相手は攻撃力2500、守備力1200である。

勝てっこねえ。

「そこにいたか!! ヤマアラシチェンソー!!」

逃げ回っている間に、本家ヒーローが登場してくれた。

複眼と触覚を模したアンテナのある、マフラーをしたトンボモチーフのヒーローである。

因みに、作者の好みによりVのつく3の人である。

「くっ!! やばいぜチェーン!!」

「とうっ!!」

あとは完全に本家ヒーローのターンである、俺の出る幕ではない。派遣ヒーローの仕事は、ここまでである。

後は、地球の警察が怪人を支援していた人間達を捕まえ、公務員ヒーロー達が俺達では対処出来ないような倒す手筈になっている。

だから正直言うと、公務員ヒーローは分相応の報酬を得ている、といえ、その通りなのである。

敵のアジトに単身潜り込み戦闘員や怪人を全滅させる、巨大化して巨大怪獣を倒す、そんな芸当など、今の俺には出来ない。

「ふう、やっと事件が解決した... 疲れた」

本当に、疲れていた。

体が鉛のようであった。

「なあ、君、派遣ヒーローだろ？」

地球人の刑事が、僕に話し掛けてきた。

俺の働きを見ていたのであれば、多分、事件の情報を収集したいの
だろう。

お安いご用だ。

事件の完全解決のために、知り得た情報を伝えるのも派遣ヒーロー
の役目なのだから。

「ええ、まあ。はい、俺はヴァイラス遊星から来た……」

俺は、まず自己紹介をしようとした。

ヒーローなのかただの仮装なのか分からなくなるケースがあるため、
自分の名前や所属をしっかりと伝えることが大切である。

そう、そのはずなのだが――

「この事件、犯人グループの一人に元派遣ヒーローがいたらしいん
だが、お前は大丈夫だよな？」

俺は、耳を疑った。

それと同時に、言葉が出なかった。

俺も命をかけて戦うヒーローである。

なのに、派遣という二文字がついただけで、ここまでの扱いを受け
なければいけないとは。

確かに、派遣ヒーローが悪の組織に雇われ、事件に荷担するケース
は年々増加している。

だがしかし、そんな奴はほんの一部であり、そういった奴は異端な
のだ。

なのに、なぜ俺は釘を刺されなければならないのか。

悔しくて、仕方なかった。

「……はい」

そう言うと、俺はまたアパートの近くの川岸に向かった。

川岸には、多分今日もおでんの屋台が出ているはずだ。

今夜はヤケ酒だ。

アルコールで、全て忘れてしまおう。

必死に働いた今日の金の何割かが、酒に消えていく。

故郷への仕送り、月末のアパートの家賃の支払いで八万近く消えていく。

ああ、命掛けなのに結婚や子育てが出来ない。

何より恋を、する余裕がない。

このままでは駄目だ。

このままでは、この辺境の星で一人淋しく老いて死んでしまう。

そうだ、派遣が嫌ならもっと専門知識を勉強し、宇宙刑事やウルトラ兄弟などの公務員より前に、一般のヒーロー会社に入り、生活を安定できればよいのだ。

まずは巨大化出来なければ話にならない。

よし、巨大化だ。

巨大化講習訓練に参加し、巨大化免許二種を取得せねば。

まだまだ、俺は戦える。

明日からも頑張っていけば、いつかきつと道が開ける。

「ああ、ヴァイラス遊星はどこだろうか……」

俺は、夜空の星を見上げた。

あの幾千、幾万の星の中の一つから、俺は地球へ派遣された。

そして今、苦しみもがきながらも、現実と戦っている。

そんなことを思いながら見上げる故郷の星は小さくて、涙で滲んでよく見えなかった――

終わり。

(後書き)

よかったら、感想くださいん。

因みにここでは派遣ヒーローは募集していませんので悪しからず。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9635i/>

派遣のヒーロー募集中時給5800円

2010年10月14日20時40分発行